

あの山の
彼方 2

小池トミジン

争うような声のする方を見て、すぐに状況がわかった。

陽介の同じクラスの「草多（そうた）」が、「しんじ」、「フトシ」、「あっちゃん」、の極悪三人組みに
虐められている。

離れて腕組みしているのが「あつし」、通称「あっちゃん」。

親がヤクザだとか、兄が有名な暴走族のリーダーだとか、
ウワサされるが、それにも増して本人の悪行が有名で、周りの子供達は恐れている。

車に火をつけた。窓ガラスを割った。、大量に盗みを働いた。、犬や猫を殺した・・・。

さらに詳細は不明だが、ウワサでは人を殺したから引越ししてきたとも言われている。

一度目をつけられると、しつこく家まで嫌がらせを続け、引越した家族までいるほどだ。

草多を押さえつけている二人は有名な馬鹿兄弟で、少し小さいほうが弟の「シンジ」。

陽介と同じクラスだが、いつも兄貴達にくっついている。

大きい方が兄の「フトシ」。「あっちゃん」と、いつも一緒にいる凶悪な男で、
高校生二人と喧嘩して勝ったという噂だ。

やられているのは「草多」。なぜか『さ行』の発音がうまくできず、いつも「先生」が「ふえんふえい」に

なってしまうため、よくみんなにからかわれている。

また、普段は、ぼーっとしている事が多く、何か心ここにあらず、
といった状態で一人笑いをしていたりするため、

周囲は皆、気味悪がってあまりかかわらないようにしている。

あつしがニヤニヤしながら

「おら、さっさとしろよ。昼休み終わっちゃうぞ。」

と、からかうように言う。

地味に暴れる草多を押さえながらフトシが笑う。

「人気者になるチャンスだぞ？フルチンで校庭走るだけだって！
おら！いい加減あきらめてさっさと逃げって！」

草多は「ぎいいー」と歯を食いしばって嫌がる。

「あっちゃんがやれって言ったらやればいいんだよ！」

必死で草多のズボンを引っ張っているシンジが、焦って叫ぶように言う。

陽介と翔は、一階に降りていき、揉みあっている三人に近づいていった。

「おーい、そうたー。」

何気ない風に陽介は声を掛けた。探してた草多をやっと見つけた、という雰囲気を出そうとした。

陽介はあくまでも涼しい顔を装いスタスタ歩いている。その半歩後ろから翔が

緊張で少しこわばった顔で小走りについて来る。

あつしが、怪訝そうな顔で振り向いて、二人を眺める。

フトシとシンジは驚いて二人を見た。シンジは、同じクラスの陽介であることがわかった途端、様々なプレッシャーを感じたようで、複雑な顔をしている。

「そうた、次の日曜日の打ち合わせしようぜ。」

自分のズボンを押さえて固まったままの草多の腕をつかみ、フトシとシンジを緩やかにほどくようにして、陽介は草多をひっぱりだした。

10歩ほど離れたところにいる翔のところへ戻った時、シンジが叫んだ。

「陽介！てめえ、何勝手なことやってんだ！死にてえのか？」

陽介と翔と草多の足が止まった。仕方なく陽介は用意していたセリフを言った。

「おれら三人で日曜に遊ぶ約束があるからさあ、その相談しないといけないんだ。」

突然、陽介の目の前が真っ白になり、激しい衝撃で首が後ろへのけぞった。

後ろから誰かが強い力で頭を引っ張っているのかと思うほどだった。

2～3歩さがり踏みとどまると、顔の中心に痛みが集まってきた。徐々にそれは強くなり、あまりの痛みに陽介は耐え切れず、目をぎゅっつつむり、鼻のあたりに手をやって押さえつけた。

しばらく動けず、声も出せずにいると、手がヌルヌルと濡れてきた。見ると真っ赤だ。

鼻と目の奥がガーンと音が聞こえるほど痛い。

鼻血と涙が、とめどなく流れ落ちていた。ポケットからハンカチを出して鼻を押さえる。

殴られた、とわかるまで更に数秒かかった。

フトシが顔の横でこぶしをブラブラさせながら言う

「あっちゃん、こいつだよ。こいつがいるせいで
シンジが5年締められねえっていった奴だよ。」

あつしがおもしろそうに言った。

「ちょうどいいじゃん。シンジ、そいつ今ぼこっちゃえよ。
俺らが見てやるよ。」

「そうだ、シンジ。やれよ。
てめえ、まさか負けねえよな？」

フトシが脅すように弟に言う。シンジの顔が真っ青になる。

こうなることを恐れていたようだ。

陽介は、鼻と口から血をブバッと吐き出しながら、うんざりした口調で

「シンジ、そんな奴らと一緒に楽しいのか？」

とシンジに問いかけた。シンジの顔が一瞬はっとするが、みるみる耳まで赤くなり

「馬鹿野郎！お前らなんかといるより一億倍楽しいぞ！
兄ちゃん達を・・・ばっ馬鹿にしてんのか！？」

と慌てて言い返す。あつしのほうを伺っているようだ。あつしはニヤニヤしたまま、

「こいつ生意気だなあ」

と、歌うように言うが、フトシは明らかにむっとした様子で

「シンジ、やれ！危なくなったら俺も手伝ってやるよ。
こいつに口の聞き方を教えてやれ。」

と、シンジに向かって凄む。

「おら、掛かって来い！」

気を取り直したシンジがファイティングポーズをとるのを見て、陽介は少し考え込んだ。

ほんとうは、ほんとうはもう、あまりの痛みに泣き出したい気分だった。

「どうした！おら！」

意気込むシンジに向かって、

「なあ、俺らが喧嘩して、すぐ決着つくと思う？」

「当たり前だ！お前なんか秒殺だよバーカ！」

フトシが割りこむが、陽介はあくまでもシンジに向かって続ける。

「シンジ。どう思う。俺はお前に勝てないかもしれないけど」

「たりめーだろ！お前なんか・・・」

続けて脅し文句を言おうとするシンジをさえぎって、

「でも、簡単に負ける気も無いぞ。」

陽介の目力に少しシンジがたじろいだ。あつしが「ほう」とつぶやき、興味を持った目で陽太を見る。

顔面血まみれで睨み返す陽介に、シンジは少し気おされたようだ。

「もし、三人にボコボコにされても、シンジ、お前だけは離さないぞ。
もうすぐ昼休みも終わるし、ここでそんなに騒いでたら、すぐに先生が来るぞ。
そうなったら色々まずいのはそっちだろ？」

それを聞いていたフトシの目が座って来た。

「こいつ、弟だけじゃなく俺達のことまで馬鹿にしたのか？
俺のパンチを食らっても立ってられるってことか？」

あつしを振り向く。あつしは腕組みしたまま、あごに手をやり、少し上を向いて考えていたが、

「ん～。なあ、こいつ、スポーツ大会で、活躍してなかった？
確か、柔道で柔道部以外の中では五年で三位になった奴じゃね？」

あっと、気づくフトシ。シンジはずっと暗い顔でファイティングポーズをとり続けている。

そんな事なら知っている、とでも言いたげだ。

「だったら、こいつの言ってることはフカシじゃないかもな。
俺らに勝てなくても、粘って10分ぐらいは立ってるかもな。」

シンジがあつしに向かって、

「大丈夫だよ！こんな奴につかまらねえよ！」

あつしはそれを無視して続ける。

「そうなる と 確かに面倒くせえな。
おう、もういいぞ。てめえら、行けよ。
また今度遊んでやるよ。」

右手をひらひらさせて陽介達を追い払うような動きをする。ほっとした陽介達がきびすを返して歩き始めると、

後ろで『ゴン！』と硬い物が硬い物にあたる音がした。

「いってえ！」

陽介が振り向くと、シンジが涙目で自分の頭を抑えている。フトシが殴ったようだ。あつしはそれを見て

ニヤニヤ笑っていた。そしてゆっくり陽介達を眺めた。目が合って、ぞっとして陽介は慌ててまた前を向いた。

その背中にあつしが声を掛ける。

「今、必死で頭使って逃げたってなあ、どうせ次はボコボコにされんだよ。次遊ぶときはお前ら全員、殺してどっかに埋めてやるよ。はははは！」

陽介と翔は、背筋が寒くなったが、なんとか早く彼らの視界から消えたくて、

そうたの手をひっぱりひっぱり、急いで歩いた。

「ようくん、大丈夫？
凄いね。よくあんな事できたね。」

小声で翔が言った。陽介はハンカチで鼻を押さえたまま、汗びっしょりになっていた。

「鼻血、大丈夫？」

「かっちゃん。は、はやくそこ曲がろう・・・」

校舎に入った途端、陽介は『はああああっ』と息をついてその場にへたり込んだ。

「こ、こわかったああああ・・・。」

ほっとした途端、涙がポロポロこぼれてきた。

「ええっ??ようくん、怖かったの?そんな風に見えなかったよ。」

翔は驚いた。実は陽介があのまま喧嘩を始めるんじゃないかと、ひやひやしていたのだ。

「いきなり殴られるとは思わなかったよ。ってえええ。」

ぶっと鼻をかむと、血の固まりがドロっと出てきた。

喉にも血の固まりが残っているようで不快だったが、身体の震えは収まってきた。

「シンジのアニキ、やばいね。びっくりした。完全にびびっちゃった。」

泣きながら笑う陽介に翔は不思議そうに聞いた。

「びびってたの?ようくん、こんな時にも冷静だなあって感心してたんだけど・・・」

「無理してたんだよ。あの、あっちゃんて奴も初めてしゃべったけど、怖いね。何するかわからないし、喧嘩しても絶対勝てないだろうな……。」

「そ、そうなの？そんなにやばかったの？」

翔も陽介の頑張りに力添えする気分で、ずっと踏ん張って、彼らを睨み付けていたことを思い出し、
今頃になって青ざめてきた。

「うん、正直シンジにだって勝てるかどうかわかんないし、喧嘩してたらやばかった……。鼻も痛くて涙も止まらなかったし。あいつらには、あんなこと言ったけど、実は、昼休みが終わって先生が来るまで耐えられなかったと思う……。」

「危機一髪だったんだ……。」

呆然として翔が言った。

草多がそんな二人を嬉しくてたまらないと言いたげな笑顔で見つめていた。

「ちょっと！あんた達！」

女子の鋭い声がして、三人は声のしたほうを向いた。

陽介と同じクラスの玉井久利子がきつい表情で腰に手をあて立っている。

「さっきの、一部始終私見てただけど！
駄目じゃない！あんなの相手にしたら！
あいつらに目をつけられたら、何されるかわかんないんだから、
大人の力を借りるべきだよ！今からでも先生に言いに行こうよ！」

陽介は慌てて涙を拭いて立ち上がった。

そして少しかっこつけて面倒くさそうに言った。

「タマコ、やめろよ。もういいよ。」

「いいよじゃないでしょ！
帰り道にリンチでもされたらどうすんの？
骨折られたり、こっ・・・殺されたりしたら・・・」

「だから、危ないからお前も関係しないほうがいいだろ？
あと、大きなお世話だ。俺らのことは俺らでやる。」

玉井は耳まで赤くなった。ムキになって続ける。

「バッカじゃないの？かっこつけちゃって！
じゃ、保健室行こうよ！血が出てるじゃない！」

「もういいって。わかったわかった。」

「何よ！せっかく言ってあげてなのに・・・！
フン！好きにすればいいわ！」

玉井は、現れた時と同じように急に向きを変えて走って行く。

玉井の剣幕に、圧倒されて三人ともあっけにとられていた。

「玉井・・・涙目じゃなかった？」

翔がぼそっと言ったが、誰も答えなかった。

『キーンコーンカーンコーン』。昼休みの終わりを告げる鐘がなった。

「日曜日のことだけど・・・」

草多の言葉に二人は振り向いた。

・・・・・・・・続く